

聖書：創世記 15：1～6

説教題：アブラムは主を信じた

日時：2023年7月16日（朝拝）

今日の箇所です。主のことがばが幻のうちにアブラムに臨みました。「アブラムよ、恐れるな。」この言葉から、アブラムがこの時、何らかの意味で恐れを抱いている状態にあったことが伺えます。彼は何を恐れていたのでしょうか。ある人は前の14章でケドルラオメル連合軍にアブラムが大勝利を収めたことと関係しているのではないかと言います。つまり勝ったには勝ったが仕返しは今に来るのではないかと恐れていたと。あるいはアブラムは突然この地一帯における王のような立場に立ち、人々の注目を集める存在となりました。そのことで次に何が起るか得体の知れない不安の中にあつたのではないかと考える人もいます。しかしこの後の2節でアブラムが語った言葉から考えると、その恐れは主の約束がなかなか実現に至っていないこととの関係で見方が良いのではないのでしょうか。アブラムは75歳の時、主の召命をいただいてハランを出発し、カナンにやって来ました。その後、試練にあつてエジプトへ逃げ、大変な経験をしました。またこの地に戻って来て親類のロトと別れたり、前回見たような戦いに身をささげました。しかし時間ばかりは経つものの、主の約束は一向に実現しそうにありません。アブラムはどんどん高齢になっています。一日一日と過ぎ去る毎に子どもが生まれる可能性はどんどん少なくなつて行きます。20代や30代の人待つのとは一日の重みが違います。もはや時間との勝負です。なのに何の兆候もない。そのような中でアブラムは恐れ、悩み、ともすると力を落としてしまい、そのような状態にあつたのではないのでしょうか。

そんな彼に主の方から「アブラムよ、恐れるな」と語りかけてくださいました。アブラムの言葉は次の2節から記されますが、その前に彼の心にあることを知っておられる神のお姿がここにあります。主は「わたしはあなたの盾である」と言われます。盾とは守るものです。ある人はここからアブラムが恐れていたのはやはり外敵からの攻撃だったのでは？と考えます。神が盾となって敵の攻撃から守ってくださるとここに約束されていると。そうかもしれません。しかしもっと広い意味で解することもできるのではないかと思います。主はあらゆる困難から彼を守り、保護し、支えてくださる方。必ず約束を実現してくださる方であるという意味で。そして「あなたへの報いは非常に大きい」と続きます。この報いとは12章1～3節の約束を指すと思います。

主はアブラムを大いなる国民とすること、彼を祝福し、その名を大いなるものとする
こと、そして地のすべての部族はあなたによって祝福されると約束されました。それ
は確かにあなたに実現すると再確認して、主は彼を励ましてくださいました。

その主に対するアブラムの言葉が2節にあります。これは聖書に記されている主に
対する最初のアブラムの対話の言葉です。彼は言います。「神、主よ、あなたは私に何
を下さるのですか。私は子がないままで死のうとしています。私の家の相続人は、ダ
マスコのエリエゼルなののでしょうか。」 さらに3節で続けます。「ご覧ください。あ
なたが子孫を私に下さらなかったのも、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょ
う。」 一見、不満をぶちまけた言葉のように聞こえます。忍耐が切れてぶち切れた
不信仰から出た言葉のようにも思われます。しかしそうではないようです。彼の言葉
はここで主に責められていません。むしろ注解者たちは、これは信仰に立つがゆえの
率直な問いだと言います。アブラムはすでに見て来た通り、多くの持ち物を持って
いました。十分に良い人生だったと満足することもできました。しかし彼は主の約束を
信じ、その実現を待ち望むからこそ、このように問わざるを得なかったということ
です。ある人は言いました。どうせ神は私たちの心をご存知なのだから自分の気持ちを
押し殺して黙っているより、率直にそれを主の前に吐き出す方が良いと。もちろん分
をわきまえつつですが、信仰に立つがゆえに自分の心配や恐れ、あるいはある種の焦
り、疑いなどを真実に主にぶつけて主と対話して良いのだと。それに対して主は答え
てくださいました。主はここで怒っておられません。アブラムの心をご存知のお方と
して、彼に答えてくださっています。4節：「すると見よ、主のことばが彼に臨んだ。
『その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者
が、あなたの跡を継がなければならない。』」 アブラムはこのままではエリエゼルが
私の跡取りになるでしょうと言いましたが、主はそうでないと言われました。「あなた
自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない」と。主はこうし
て彼の問いに答えてくださり、なおご自身を信頼するようにと励ましてくださいまし
た。

主は5節で彼を外に連れ出します。つつい自分の殻の中に閉じこもりがちだった
アブラム、天幕の中で年老いた自分とサライを見てため息ばかりつくことの多かった
アブラムを外へ連れ出されました。そして「さあ、天を見上げなさい」と言われます。
さらに「星を数えられるなら数えなさい」と言われます。主はこうしてご自身の創造

のみわざをアブラムに仰がせます。そこには無数の星を無から造り出し存在させている神が証しされていました。その数を数えられるなら数えなさいと言われても、とても数えることはできません。人間の考えをはるかに超えてみわざを行っておられる神の偉大な力がそこに示されていました。そして主は言われました。「あなたの子孫は、このようになる。」さてこれに対してアブラムはどう応答したでしょうか。私たちならどうでしょう。年老いてまだ子どもがいません。どんどん時間は過ぎていきます。そんな中、夜空を仰いで無数の天の星を認め、あなたの子孫はこのようになると主から言われました。果たして私たちならどう応答するでしょう。

これに対するアブラムの応答が 6 節に記されます。「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」これは創世記の中でも最も重要なみことばの一つです。ご存知の通り、これは新約聖書でいわゆる信仰義認の教理が述べられる際、その根拠として引用されている御言葉です。ローマ人への手紙 4 章 3 節、ガラテヤ人への手紙 3 章 6 節、ヤコブの手紙 2 章 23 節で創世記 15 章 6 節がそのまま引用されています。つまり信仰による義は新約聖書独特の教えではないということです。旧約時代は律法を守って救われ、新約時代はイエス・キリストを信じて救われるというのではないのです。旧約時代も新約時代も救いの方法は同じです。どちらもただ信仰によります。その証拠がここにあります。信仰の父アブラハムも私たちと同じく、ただ信仰によって義と認められたのです。いや正しい言い方は逆であって、アブラハムが信仰によって義と認められたのと同様に新約の私たちも同じ方式で救われるということを聖書は語っていることになります。

この 6 節の意味をもう少し考えて行きたいと思います。6 節に「アブラムは主を信じた」とあります。これは具体的にどういうことでしょうか。アブラムは主について何を信じたのでしょうか。その信仰の内容はどのようなものだったのでしょうか。文脈から考えて明らかなことはアブラムが信じたのは主がアブラムに子孫を与えてくださるということです。しかしこれは単に年老いた自分に赤ちゃんが与えられることを信じたということではありません。それで彼が義と認められたわけではありません。ここでアブラム自身から生まれ出る者が彼の後を継ぐと言われた主の言葉は、すでに見た 12 章 1～3 節の主の約束の言葉のリニューアル版と言えるものです。主は 12 章 3 節で「あなたによって、地のすべての部族は祝福される」と言われました。その「あなた」とは直接的にはアブラムを指しますが、同時に彼を頭とする彼の子孫をも包含

する言葉であることを以前に見ました。そして特にその「あなた」は、やがてアブラムから出る一人の子孫に焦点が当てられていることについても以前に見ました。それはイエス・キリストです。神は人間が墮落した直後の創世記 3 章 15 節、原始福音と言われる御言葉において、やがて女から出る一人の子孫を通して人間を救うと約束されました。その約束の担い手としてアブラムは選ばれました。ですからアブラムに約束された将来彼から出る一人の子孫とは、創世記 3 章 15 節の原始福音においてやがて神が与えると言われた一人の女の子孫と同じ方、すなわちイエス・キリストを指します。このことについてはガラテヤ人への手紙 3 章 16 節がはっきりと次のように語っています。「約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、『子孫たちに』と言って多数を指すことなく、一人を指して『あなたの子孫に』と言っておられます。それはキリストのことです。」

ですからアブラムは単に赤ちゃんを持つ親になりたいと願ったのではありません。肉の子孫、地上的な跡継ぎが欲しくて神とやり取りしていたのではありません。彼が待ち望んだのは神の救いの計画の実現です。神が子を与え、やがて救い主を誕生させ、その方によって世界と自分を罪とその苦しみから贖ってくださることです。アブラムがそのように約束の救い主こそを待ち望んだことについては、イエス様がヨハネの福音書 8 章 56 節ではっきりこう語っておられます。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」 ですからアブラムの信仰はキリストを見つめるものだったのです。しかしこの時の彼を取り巻く状況は、その約束が実現しそうにないものでした。ローマ人への手紙 4 章 19 節にアブラムを指して「彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、云々」とあります。人間的に考えればもはや新しい命を誕生させることは不可能。そういう意味で死んだも同然の状態にありました。自分たちを見る限り、望みはありません。そんな中、神はあなたの子孫は天の星のようになると言われました。その言葉を聞いてアブラムは主を信じたのです。主が一人の救い主をやがて必ず与えて救いを実現してくださることを信じて、そのように約束しておられる主を信じ、主にすがったのです。

その彼に対して主がしてくださったことが最後の 6 節後半に記されています。「それで、それが彼の義と認められた。」 ここで言われている「義と認められた」とはど

ういうことでしょうか。これは神に受け入れられる者となったということです。神は義なる神です。その神はご自身の律法に完全にかなう歩みをした人しか受け入れることはできません。律法を完全に満たした人こそ義なる人です。その人は神と正しい関係にある人として神からの豊かな祝福を受けて生きることができます。アブラムはそのような状態にある人として認められたと言います。一体どのようにしてでしょうか。

それは行いによってではありません。パウロはローマ人への手紙 4 章で、この創世記 15 章 6 節を引用し、義と認められるのは行いによるのではないと語っています。確かにここでアブラムは良い行いをして義と認められたとは言われていません。彼は直前の 13 章、14 章では立派でした。しかしその前の 12 章後半では妻サライを妹だと偽り、彼女はエジプトの王ファラオの妻として召し入れられ、神の約束は終わりとなるところでした。ただ主の憐みによってアブラムは助け出されました。この後の 16 章でもアブラムは失敗します。その後もそうです。アブラムは立派に歩んだから義と認められたのではありません。ここに「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」とあります。彼が義と認められたのはただ信仰を通してです。そのことをこの創世記 15 章 6 節は述べています。

しかし私たちは信仰による義と言うあまり、もう一つの間違いに陥らないように注意する必要があります。それは信仰が一種の行いにすり替わる危険です。信仰によって義と認められるとは、行いはダメだが、信仰が立派なので、義と認められるという意味ではありません。しばしばここはそのように誤解されやすい箇所です。アブラムは信じにくい状況で信じました。子どもが与えられそうにない年齢に達していたのに主を信じました。そのようなすごい信仰、立派な信仰のゆえに彼は救われたと。しかしそのように取るなら結局人間を誇ることになります。行いによらず信仰によってと言いながら、それは形を変えた人間の行いになってしまいかねません。

ここの「義と認める」という言葉について、他の箇所での用法と比べて分かることは、これは「見なす」とか、そのように「考える」という意味であるということです。義であるから義と認めるのではないのです。これは義と「見なす」という意味です。あるいは義と「考える」ということです。それ自体は義ではないが、神が義であると見なしてくださる。そう考えてくださる。ですからこれは神の恵みの行為なのです。従って私たちは自分の信仰はどれくらい立派だろうかと自分の信仰ばかりを見つめ

ていてはいけません。自分の内側をいくら覗き込んでも、そこに良いものは何もありません。信仰の特性は信じる対象に目を向けることです。信仰とは相手を信じることです。神とその約束の御言葉に思いを集中することです。そしてその神と神のみことばを信じる時、神は恵みによって私たちの信仰を義と見なしてくださるのです。私たちを正しいと宣言し、受け入れてくださるのです。神がそのようにできるのは、約束の中心にあるイエス・キリストの十字架の贖いを通してということになります。今日はここまでですが、続く 15 章残りの箇所、神は私たちが神を信じることができるためのさらなるしるしをくださいます。そこでも神を良く見ることが大事です。その神を信じて、信仰による義の祝福の中を歩むようにと神は招いてくださるのです。

パウロはローマ人への手紙 4 章で、創世記 15 章 6 節を引用した後、5 節で「不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます」と言います。私たち自身を見るなら希望はありません。今日の章最初のアブラムのように、恐れ、悩み、ため息をついているだけのような者です。しかし神は罪と悲惨の中に落ちた私たちをそのまま捨ててはおられません。一人の救い主によって救うという約束を与え、死人同然の状態にある者たちをいのちに生かしてくださいます。神はその救いの計画をはるか昔に立ててくださり、同じ福音をもって今日も私たちに語っておられます。私たちはその言葉に聞き、自分の信仰を見るのではなく、神とその約束の言葉に思いを集中し、それを信じる歩みへ進みたいと思います。そして御前に義なる者として立たせていただき、神の豊かな祝福に生かされる者とされたいと思います。そしてこの幸いを私たちの歩みを通して周りの方々に宣べ広め、すべての部族が祝福されるという神の御心に仕えるために用いられる歩みへ導かれたいと思います。